

# 夏目漱石「こころ」における「私」の存在

力久夏実

はじめに

書誌

初出『東京朝日新聞』（大正三年四月二十日～八月十一日）

『大阪朝日新聞』（大正三年四月二十日～八月十七日）

※『大阪朝日新聞』の方が連載期間が長いのは、『東京朝日新聞』に比べ、『大阪朝日新聞』の休載回数が多かつた為）

……「今度は短篇をいくつか書いて見たいと思ひます、その一つ一つには違つた名をつけて行く積ですが、予告の必要上全体の題が御入用かとも存じます故それを「心」と致して置きます。」……

（「心」予告 『東京朝日新聞』大正三年四月十六日、『大阪朝日新聞』大正三年四月十七日掲載）

（引用は『漱石全集』第十六卷 一九九五年 岩波書店より）

とあるように、当初の構想としては、短篇をいくつか書き、その総題を「心」とする予定であった。またこの連載作品（今日における小説「こころ」）には元々「先生の遺書」という題がついていた。

初刊『心』岩波書店（大正三年九月二十日）自序

『心』は大正三年四月から八月にわたつて東京大阪両朝日へ同時に掲載された小説である。

当時の予告には数種の短篇を合してそれに『心』といふ標題を冠らせる積だと読者に断つたのであるが、其短篇の第一に当る『先生の遺書』を書き込んで行くうちに、予想通り早く片が付かない事を発見したので、とうとうその一篇丈を単行本に纏めて公けにする方針に模様かへをした。

然し此『先生の遺書』も自から独立したやうな又開

係の深いやうな三個の姉妹篇から組み立てられてゐる以上、私はそれを『先生と私』、『両親と私』、『先生と遺書』とに區別して、全体に『心』といふ見出しを付けても差し支えないやうに思つたので、題は元の儘にして置いた。たゞ中味を上中下に仕切つた丈が、新聞に出た時との相違である。

(引用は『漱石全集』第十六卷 一九九五年 岩波書店より)

巻頭には以上の様な「序」が付され、連載に当たつての心積もりと執筆中ならびに完結後の変化について触れている。また、「先生の遺書」を「先生と私」、「両親と私」、「先生と遺書」に區別して、全体に『心』という見出しを付けるという構成について述べられており、単行本はこの構成に従っている。

※作品「こころ」の表記としては、「心」「こゝろ」「こころ」等あるが、本稿においては「こころ」と表記する。

※本稿における本文の引用はすべて『漱石全集』第九卷(一九九四年 岩波書店)による。また、引用の後に括弧で引用もとの節を示す。

## 本論の狙い

「こころ」は前半が「私」、後半が「先生」によって語られる物語である。後半の「先生」が語る部分は、「私」に向けて書かれた手紙であり、またそれと比較して前半部の「私」の語りは「読者」に対してこの手紙を紹介する役割を担っているとも言える。(作中の後半部は「先生」の書いた手紙であるので、一人称は「私」となっているが本稿では都合上前半部の語り手を「私」、後半部の語り手を「先生」と表記する)

この作品の核心とも言えるのは「先生」という人物の過去であり、物語の後半部で語られる出来事である。発表当初も「先生」を最たる重要人物と捉える向きが多かつたようであるし、(勿論これは先に触れたようにこの作品の発表当時のタイトルが「先生の遺書」であつた事にも起因していると考えられる)、発表から百年近くたつた今日においても「こころ」という作品は多く「先生」の物語として受容されている。例えば、「先生」とKと「お嬢さん」の三角関係の話であると見たり、もしくは友人を裏切つた罪悪感に煩悶する「先生」の話であると言ったり、兎角後半部に焦点を当てた捉え方が一般的であると言えるだろう。

しかしながら、この「こころ」という作品は先にも述べたように、二人の語り手によって形作られた物語であつて、

各々の語りの分量というのは殆ど変わらぬものである。また「先生」の語りによって語られる部分というのは、あくまで「私」宛の手紙なのだ。それを鑑みてみれば、「こころ」という作品は確かに「先生」の過去が主軸となつてゐる物語かも知れないが、語りの観点からしてみるとむしろ重要なのは「私」なのではなからうか。そうであるとするならば、この作品において「私」の果たしている役割とは、「私」の持つ意味とは何であるだろうか。このような考えによつて、この「私」という語り手について見ていきたい。

一 「私」という存在——「こころ」の語り手

一——「私」と「先生」

「こころ」の一節から五十四節（「上 先生と私」、中 両親と私）を語る「私」という人物について、『漱石全集』第九卷（一九九四年岩波書店）の注釈（重松泰雄氏）には以下のように纏められている。

『心』『五十四』までの手記の書き手。「五十五」以後の「先生」の遺書を紹介するために、主として生前の先生や「奥さん」との交渉、郷里の自己の父母らに

ついで回想的に語る。明治四十五年七月に大学（中略）を卒業しており、平均的に言つて明治二十年前後の生まれとなる。（後略）

この「私」は作品冒頭部において「其時私はまだ若々しい書生であつた」（二）とされておられ、このあと十一節において「其時の私は既に大学生であつた。始めて先生の宅へ来た頃から見るとずつと成人した氣であつた」と語つてゐる事から、冒頭部では高等学校の生徒であつたであろうことが推測される。「私」は作中においてちょうど大学（東京帝国大学）を卒業したあたりの事までを語つてゐるので、この作中時期において、「私」は高等学校生→大学生であり若き書生ということになる。

「私」と「先生」の出会いはいは鎌倉であつた。二人の住む東京を離れた少し「特別」な場所ではあつたにしろ、特別何か二人の仲が懇意になるような出来事があつた訳ではない。「私」が「先生」を雑踏の中から見つけたのは、「先生」の連れであつた西洋人の事を考慮に入れると自然な事であると考えられよう。しかし、「私」と「先生」が交流を持ち始めるに至る過程は寧ろ不自然なくらいである。「私」は「先生」の事を以前何処かで見たような氣がしてゐたもの、そのことに關して「先生」に問うてみたところ、「先

生」は「何うも君の顔には見覚がありませんね。人違ぢやないですか」(二三)と答えている。このことに關してははつきりした事は言えないが、それでも元々ながしかの接点が「私」と「先生」にあつたとは考えにくいだろう。

これらの事を踏まえてみても、「先生」と「私」の交流というものは、ただ「私」の積極的な接近によつて作られたに過ぎない。「私」自身も自分で「直感」という言葉を使つてゐるが、作品の初期段階において「私」は「先生」にこれといった理由なしに惹かれていくのである。

このように「私」が「先生」に惹かれていくということは、「まごころ」の一節から三十六節(上 先生と私)においてこと顯著に書かれている。「私」は「先生」に惹かれ、「先生」へと接近していき、そして「先生」を知らば知るほどまた「先生」に惹かれていく。「私」が「先生」に惹かれてゐるという場面は枚挙にいとまがない。以下に、印象的なものを挙げてみる。

私は最初から先生には近づき難い不思議があるやうに思つてゐた。それでゐて、何うしても近づかなければ居られないといふ感じが、何処かに強く働らいた。斯ういふ感じを先生に対して有つてゐたものは、多くの人のうちで或は私だけでも知れない。然し其私丈に

は此直感が後になつて事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々しいと云はれても、馬鹿げてゐると笑はれても、それを見越した自分の直覚をとにかく頼もしく又嬉しく思つてゐる。(六)

これは「先生」の家を訪れるようになった頃の「私」の心情について述べているものである。この感じの事を「私」は「直感」「直覚」と表現しており、やはりここにも明確な理由はない事が分かる。

このように、「私」は別段の理由なしに「先生」に惹かれていく。そして、「先生」のことを大いに尊敬し、好意を寄せていく事になるのである。

#### 一一二 「私」と父

「先生」のことを敬愛していた「私」であつたが、その一方で「私」の語りの終末部、危篤の父がいるにも関わらず汽車に飛び乗つて「先生」のいるはずである東京へ向かうなど、父への態度には決して愛情が深いとは言ひ難い一面がある。

まず、「私」が「先生」と父とを比較している場面を取り上げて見ていく。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きてゐるか死んでゐるか分らない程大人しい男であつた。他に認められるといふ点からいへば何方も零であつた。それでゐて、此将棋を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往來をした覚のない先生は、娯楽の交際から出る親しみ以上に、何時か私の頭に影響を与へてゐた。たゞ頭といふのはあまりに冷か過ぎるから、私は胸と云ひ直したい。肉のなかに先生の力が喰ひ込んでゐると云つても、血のなかに先生の命が流れてゐると云つても、其時の私には少しも誇張でないやうに思はれた。私は父が私の本當の父であり、先生は又いふ迄もなく、あかの他人であるといふ明白な事実を、ことさらに眼の前に並べて見て、始めて大きな真理でも発見したかの如くに驚ろいた。

(二十三)

以上は、「私」が故郷に戻つてから、将棋を指したりして病床にある父の退屈の相手をしているような時に、「私」が父と「先生」を比べてみて感じ得た事である。

この中で「私」は「先生」と父とを比べてみて、両者と

も世間からみれば同じような生きてゐるのかどうかも分からない大人しい男であり、人に認められていないという点からも「先生」と父は同じである、と考へている。しかしそれはあくまで「世間から見た」場合であり、「私」自身は「先生」と父を全く別のものとして捉へている。「私」にとつて父は「単なる娯楽の相手としても」物足りないような人であるのに対し、一方「先生」は「私」自身に多大な影響を与へている、と「私」は語つてゐる。

また、以下は田舎に帰つた「私」が「先生」と父について思いを巡らせてゐる場面である。

「卒業が出来てまあ結構だ」

父は此言葉を何遍も繰り返した。私は心のうちで此父の喜びと、卒業式のあつた晩先生の家の食卓で、「御目出たう」と云はれた時の先生の顔付とを比較した。私には口で祝つてくれながら、腹の底でけなしてゐる先生の方が、それ程にもないものを珍しさうに嬉しがる父よりも、却つて高尚に見えた。私は仕舞に父の無知から出る田舎臭い所に不快を感じ出した。(三十七)

先生と父とは、丸で反対の印象を私に与へる点に於て、比較の上にも、連想の上にも、一所に私の頭に上り易

かつた。(四十四)

先に述べた通り、「先生」と父は世間に認められる事がないという点においては似たような人物であるが、やはり「私」にとつては全く違った感じを与える二人として語られている。「私」は肉親である父以上に「先生」の事を、近い、尊敬すべき存在として認識しているのだ。

物語の中盤、「私」は自らの父が危篤に陥っているにも関わらず、東京行き列車に駆け込んで「先生」のもとへと向かってしまう。危篤の父と「此手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもう此世にはいないでせう。とくに死んでゐるでせう」(五十四)と手紙に書いてよこした「先生」と、死を目前にしているという点においては同じ状況にある。しかしながら、「私」は父のことを気にかけてつても「思いつた勢で東京行の汽車に飛び乗つ」(同)ただ。ここにも「私」の「先生」と父とに対する意識の差が見られる。さて、「先生」と父とに対するこの差はどこから生まれたものであつたのだろうか。

これに対しては二つの要因が考えられる。一つには、父を卑下するのは血が繋がっているからこそだということである。父は近い存在であるからこそ卑下の対象となり、「先生」は遠い存在であるから憧れの対象となつたと考えられ

るだろう。

もう一つは、「先生」は「私」にとつて東京及び知識人の象徴であり、父は故郷すなわち田舎及び無知の象徴であつたということである。「私」も言っているように「私」は父の田舎くさいところに不快さを感じている。その一方で「先生」に対しては東京という連想が働いたのだろう。「私」は田舎から東京へと進学した上京志向のある青年だが、作中時点での「私」はまだ東京にでてきたばかりの「田舎」者であり、そんな「私」が東京に抱いていたのは自らが獲得していかないものに対する憧れという感情だつたと言える。東京に憧れを抱く「私」は自然と「東京の人」である。「先生」のことを希求したのだ(「先生」の出身は新潟であるので、「先生」が生粋の「東京人」だとは言えない。しかしながら、「私」と出会つた頃には「先生」は故郷を捨て長らく東京に居を構えており、「私」から見れば「先生」は十分に「東京の人」であつたと言えるだろう)。また、父は同時に「無知な」存在としても「私」の眼には映っている。一方「先生」は教授の意見よりも有難いと思える程の思想を持っている(「私」から見て)一級の知識人であつた。

これらのことから「私」は「先生」に自分自身と違う点を求め、また「東京」の「知識人」という、自らの求めながらも現時点では持っていない性質を持っている存在とし

て惹かれていったと考えられる。

### 一―三 若き「私」

さて、一章の最後に「私」自身のことについて述べておきたい。

一章一節で述べたように、「私」は作中時期（一節から五十四節の間の時期）において、若き書生であったことが分かる。この「私」には二つの時間軸が存在している。それは作中に「書かれている」時間軸の中の「私」（過去の「私」と、作中の出来事を「語っている」時間軸の中の「私」（現在の「私」）である。作中に「書かれている」時間軸と「語っている」時間軸にある程度の隔たりがあることは、「其時私はまだ若々しい書生であった」（一）「子供を持った事のない其時の私は、子供をたゞ蒼蠅蒼蠅いもの、様に考へてゐた。」（八）などの過去を回想する「私」の語り口から分かる。また、「私」は自分のことを語りの中で度々「若い私」というように言及している。例えば以下の様な場面である。

（傍線論者）

私は最後に先生に向つて、何処かで先生を見たやうに思ふけれども、何うしても思ひ出せないと云つた。若

い私は其時暗に相手も私と同じ様な感じを持つてゐはしまいかと疑つた。（三）

然し其私丈には此直感が後になつて事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々しいと云はれても、馬鹿げてゐると笑はれても、それを見越した自分の直覺をとにかく頼もしく又嬉しく思つてゐる。（六）

若い私は全く自分の態度を自覺してゐなかつた。それだから尊いのかも知れないが、もし間違へて裏へ出たとしたら、何んな結果が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れてゐたのである。（七）

父は勝つた時は必ずもう一番遣らうと云つた。其癖負けた時にも、もう一番遣らうと云つた。要するに、勝つても負けても、炬燵にあたつて、将碁を差したがる男であつた。始めのうちは珍しいので、此隠居じみた娯楽が私にも相当の興味を与へたが、少し時日が経つに伴れて、若い私の気力は其位な刺戟で満足出来なくなつた。私は金や香車を握つた拳を頭の上へ伸ばし

て、時々思い切つたあくびをした。(二十三)

考へると是は私がまだ世間に出ない為でもあり、又實際其場に臨まない為でもあつたらうが、兎に角若い私には何故か金の問題が遠くの方に見えた。(二十九)

このように繰り返し「私」自身に「若い」という言葉が用いられていることから、この「若い」「私」という点も、着目すべき点の一つだと考えられる。

「若い」という言葉には、「私」の「先生」へと理由なく惹かれていった様子や、「私」が「先生」の態度に一喜一憂する態度が表されている。他にも、この「若い」という言葉から、ある種の「欠落」を読み取ることもできるのではなからうか。「若い」「私」は満たされざる存在だったのである。

その事に関して、「先生」が「私」について以下の様に述べている場面がある。

「私は淋しい人間ですが、ことによると貴方も淋しい人間ぢやないですか。私は淋しくつても年を取つてゐるから、動かずにゐられるが、若いあなたは左右は行

かないのでせう。動ける丈動きたいのでせう。動いて何かに打\*つかりたいのでせう。……」(七)

「私」が「先生」のところへと動いて来ているのは、「私」が淋しい人間で、若いからと述べている。「淋しい」ということは、「満たされない、満足できない、ものたりない」ということである。そして「私」はその「淋しさ」「満たされなさ」から、「先生」へと接近していつているのだ。先の「先生」の言葉にある「動いて何かに打つかりたい」からは、「私」が何かしらを追い求めている(と、少なくとも「先生」はそう感じている)ことが分かる。このようなことから、「私」の「若い」という形容にはある種の「欠落」を読み取る事もできるのだ。

他にも「先生」は「私」のことを「恋で動いてゐる」(十三)といい、「目的物が無いから動くのです。あれば落ち付けるだらうと思つて動きたくなるのです」(同)「あなたは物足りない結果私の所に動いて来た」(同)と表現している。「物足りない」しかし「目的物が無い」「私」は、自らを惹きつける「先生」のもとへと動き続けた。

また、作中には以下のような文もみられる。

私は又軽微な失望を繰り返しながら、それがために先



生から離れて行く気にはなれなかつた。寧ろそれとは反対で、不安に揺かされる度に、もつと前へ進みたくなつた。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、何時か眼の前に満足に現はれて来るだらうと思つた。私は若かつた。けれども凡ての人間に対して、若い血が斯う素直に働かうとは思はなかつた。私は何故先生に対して丈斯んな心持が起るのか解からなかつた。(四)

年の若い私は稍ともすると一図になり易かつた。少なくとも先生の眼にはさう映つてゐたらしい。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであつた。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであつた。とゞの詰まりをいへば、教壇に立つて私を指導して呉れる偉い人々よりも只独を守つて多くを語らない先生の方が偉く見えたのであつた。(十四)

やはりこのように、「私」は若さゆゑに「先生」にひかれていくという側面があつた。「私」が「先生」に求めていたものは、『私』の持たざる何か。であつただらう。これは前節で述べたように「東京」「知識人」といった地位や格だつたかもしれない。大きく言つてしまえば、やは

り「私」が持ち得なかつたもの、「先生」が持つていた「私」と違う点、という風に纏められるであらう。しかしながら、この「何か」は「私」自身にも、そして「先生」にすら分らない「何か」であつた。

そしてこの明確な目的すらなくひたすらに「何か」を追い求めようとする姿も、また「私」の若さを現していると言えるであらう。一章一節でみたように、「私」は理由もなくただひたすらに「先生」に惹かれていくが、そこには「私」の若さという側面が大いに関わつていゝと言へる。

この若さという点に関しては、また二章二節「先生」に於ての「私」の中で考察していく。

## 二 淋しい人「先生」

二一 謎多き「先生」と「先生」の過去を希求する「私」

「先生」という人物に惹かれていき、そして接近していった「私」ではあつたが、「私」の近づいて行つた「先生」という人物は謎多き人物でもあつた。毎月一人で参つていくという雑司ヶ谷にある友人の墓のこと。大学出身であるにも関わらず何もしないで遊んでおり世間にまるで名前を知られていないということ。厭世的で人の事を兎角信用し

ないこと。つかみ所のない、抽象的な物言い。これらに關して、「先生」に傾倒していった「私」はもどかしさを感じていた。そして同時に「私」はその様な「先生」を作り上げた「先生」の過去について思いを巡らせる。

「先生」の過去は謎多きものであった。

私は先生の此人生觀の基点に、或強烈な恋愛事件を仮定して見た。(無論先生と奥さんとの間に起つた)。先生がかつて恋は罪悪だといつた事から照らし合せて見ると、多少それが手掛りにもなつた。然し先生は現に奥さんを愛してゐると私に告げた。すると二人の恋から斯んな厭世に近い覺悟が出やう筈がなかつた。「かつては其人の前に跪づいたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせやうとする」と云つた先生の言葉は、現代一般の誰彼に就いて用ひられるべきで、先生と奥さんの間には当てはまらないもの、やうでもあつた。(十五)

このように、「先生の此人生觀の基点」をいくら考えてみても、「私」の中でこれといった答えは出なかつたのである。「先生」の過去は、「私」が想像していた以上に複雑なものであつたのだ。

「私」が「先生」の妻である静にどうして「先生」は世間的にもつと活動をしないのかと聞いた時に「若い時はあんな人ぢやなかつたんですよ。若い時は丸で違つてゐました。それが全く變つて仕舞つたんですよ」(十一)と静は答えた。これも「私」にとつては不思議なことだつたに違いない。「私」は静と「先生」宅で留守番をする機会があつた時、静にこのことを再び尋ねている。静は「先生」のことを「あなたの希望なさるやうな、又私の希望するやうな頼もしい人だつたんです」(十八)と述べた上で「段々あ、なつて来た」(同)と言つている。この時「私」は静から「先生」が大学を卒業する少し前に大變仲の良かった友人が「実は変死」(十九)し、その後「先生」の性質が段々變つて来たという話を聞いた。静は「私」に「人間は親友を一人亡くした丈で、そんなに變化できるものでせうか。私はそれが知りたくつて堪らないんです。だから其所を一つ貴方に判断して頂きたいと思ふの」(同)と判断を委ねているが、「私」はこの靜の疑問に対し否定の氣持ちでいた。ただ友人が死んだということが「先生の此人生觀の基点」になり得るとは考えにくかつたのだ。

また、以下のような場面もある。恋の罪惡について「先生」と「私」が話をしながら歩いている際、突然「先生」が何故自分が毎月雜司ヶ谷の墓地に埋まつている友人の墓へ參

るのか知っているか、と「私」に問うた。勿論「私」には答えられない質問である。「私」がしばらく返事をしないしていると、「先生」は始めて気が付いたかのように「又悪い事を云つた。焦慮<sup>ちち</sup>せるのが悪いと思つて、説明しやうとすると、其説明が又あなたを焦慮せるやうな結果になる」(十三)と述べた。「私」が追い求めた「先生」の不思議を埋める真実について、「先生」自身も「私」に打ち明けようとするが、うまく言い表す事ができず、「私」の中では「先生」に対する謎ばかりが増えていったのだ。それがまた「私」自身の「先生」の過去を知るといふことに關する欲求を強めていったのである。

## 二二二 「先生」にとつての「私」

「私」にとつて「先生」は敬愛しどころまでも惹かれていく存在であった。その一方で「先生」にとつて「私」はどのような存在であつたのだろうか。

「貴方は現代の思想問題に就いて、よく私に議論を向けた事を記憶してゐるでせう。私のそれに対する態度もよく解つてゐるでせう。私はあなたの意見を軽蔑迄しなかつたけれども、決して尊敬を払い得る程度には

なれなかつた。あなたの考へには何等の背景もなかつたし、あなたは自分の過去を有つには余りに若すぎたのです。私は時々笑つた。あなたは物足りなさうな顔をちよいく私に見せた」(五十六)

「先生」にとつて「私」は決して尊敬できる人物という訳ではなかつた。「先生」にとつて「私」はあくまで若輩者であり、なにかしらを得る事のできる人物ではなかつたのである。しかし、だからといって「先生」にとつての「私」は決してないがしろにすることも出来ない人物であつた。それは「先生」が自らの過去をたつた一人、「私」にだけ打ち明けようとするところからも明白である。

最初に「先生」の過去を彼に聞いたのは「私」である。その「無遠慮」さに「先生」は「あなたは私の思想とか意見とかいふものと、私の過去とを、ごちやくに考へてゐるんぢやありませんか」(三十一)と言ひ自分の頭で纏め上げた考えをむやみに人に隠す必要はないんだから隠しはしないけれども「私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それは又別問題になります」(同)と、過去を物語することを拒んでいる。しかし、「私」の「たゞ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです」(同)「もし私の命が真面目なものなら、私の今いつた事も

「真面目です」(同) という言葉に、「私」に過去を打ち明けようと覚悟する。

この「私」に過去を打ち明けるといふことに関して、「先生」は自身の遺書の中で以下のように述べている。

其極あなたは私の過去を絵巻物のやうに、あなたの前に展開して呉れと逼つた。私は其時心のうちで、始めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或生きたものを捕ま<sup>とら</sup>えやうという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜らうとしたからです。其時私はまだ生きてゐた。死ぬのが厭であつた。それで他日を約して、あなたの要求を斥けてしまつた。私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴びせかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停まつた時、あなたの胸に新しい命が宿ることが出来るなら満足です」(五十六)

このように「先生」は「私」の無遠慮さ、真つ直ぐさに心打たれてその過去を打ち明けようと思つたと考えられる。この前半部における「私」の「先生」に対する態度を「私」自身も「年の若い私は稍ともすると一図になり易かつた。少なくとも「先生」の眼にはさう映つてゐたらしい」(十四)

と述べている。この「一途」な「年の若い」「私」というのが、「先生」に信用をもたらしただと考えられる。人に騙された過去を持つ「先生」は、真つ直ぐな青年であつたからこそ「私」を信じ自らの過去を託そうと思つたのだろう。この「一途」な「私」というものは「私」の若さによつてもたらされていたとも考えられる。「先生」は、「私」が真つ直ぐな青年であつたからこそ「私」を信じ自らの過去を託そうと思つたのだろう。

またこの真つ直ぐな青年という姿は、若かりし頃の「先生」とも重なる。「先生」は両親の間に出来た「たつた一人の男の子」(五十七)で、家には「相当の財産があつた」(同)ので、鷹揚に育てられた少年だつた。しかし、両親が亡くなり、父からも信用され褒められていた「誇りになるべき叔父」(五十八)に死んだ両親が残した財産を誤魔化され、人間不信に陥つてしまふ。その後「先生」は旧友のKが困窮しているのを見て、手を差し伸べようとする。下宿先の奥さんにはKを下宿先へと招き入れることを反対されるものの、「先生」は、生活にかかる月々の費用を金の形で並べると受け取るのを躊躇するであろう「独立心の強い」(七十七) Kの為に、自らの下宿先にKを置いて「二人前の食料を彼の知らない間にそつと奥さんの手に渡さう」(同)としたのだ。「先生」はKについて「水を日向へ出して溶

かす工夫をし」「今に融けて温かい水になれば、自分で自分に気が付く時機が来るに違いない」(同)と思つていた。例え奥さんから反対されたとしても、自らがKの為になると信じたことを貫き通したのである。以上のように、鷹揚に育ち、自らの正しいと思うところを実行するある種の真つ直ぐさというものを「先生」も持つていた。しかしながら、その後親友であつたKを裏切つてしまつたという考えにより、自責をし、自分自身さえ信じられなくなつてしまつたことにより、その「若さ」「真つ直ぐさ」というものを物語時点での「先生」は失つてゐる。「私」の姿は過去の「先生」とも重なり、さらにそれが「先生」の信用を生んだのではなからうか。

また「先生」はこうも述べてゐる。

実際こゝに貴方といふ一人の男が存在してゐないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでせう。私は何千万とある日本人のうちで、たゞ貴方丈に、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから」

(五十六)

「先生」は「私」が相手だつたからこそ、遺書という形で自分の過去を打ち明けようとしたのである。

三 「先生」の遺書——何故「私」だつたのか

三一— 遺書が先か「私」が先か

「先生」は長い手紙を「私」宛てに残した。これこそが「私」の希求した「先生」の過去であつた。

「先生」の過去をそもそも望んだのは「私」であり、「私」との約束によつて「先生」はこの遺書を書いたと考えられるが、もともと「先生」の方にも誰かに過去を打ち明けたという望みはあつた。それは、以下のような「先生」の記述から窺える。

「其上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。私の過去は私丈の経験だから、私丈の所有と云つても差支ないでせう。それを人に与へないで死ぬのは惜いとも云はれるでせう。私にも多少そんな心持があります」(五十六)

「私の努力も単に貴方に対する約束を果すためばかり

ではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです」(百十)

「先生」は自らの過去を語るといふ欲求を持っていた。たつた一人、妻を除いて「私は私の過去を善悪とともに他の参考にする積」(百十)だったのである。しかし、「先生」は同時に「受け入れることの出来ない人に与へる位なら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬つたほうが好いと思ひます」(五十六)というように、不特定多数の人にその過去を晒しだす気はないのである。これらの事は一見矛盾しているように見える。

ここで重要になつてくるのは「遺書を公開する者」の存在であろう。「先生」は「私」宛てに遺書を書き残した。「私」が遺書を受け入れることの出来る者であつたとすれば、同時に「公開する者」でもあつたのである。「先生」はただ一人、「私」にのみ遺書を書いたが、それを他者に与えるか否かについては「私」の判断に任せた。ここで「私」といふ遺書を受け入れ、そして公開することの出来る者がいなければ、「先生」の遺書はついぞ「他の参考」にはならなかつたのである。あくまで、「私」といふ存在がいたからこそ、「先生」の遺書は存在しえたのだ。

先にも述べた、「私」が「先生」に対してその過去を教

えてくれるよう頼んだという場面について、「先生」は「私は其時心のうちで、始めて貴方を尊敬した」(五十六)と云つており、その理由は「あなたが無遠慮に私の腹の中から、或生きたものを捕まへやうといふ決心を見せたから」(同)としている。この「或生きたものを捕まへやうといふ決心を見せた」というのは、かつて「私」が「先生」に「先生の過去を教えてもらうようお願いしたときのことだろうと考えられる。このとき「私」は「先生」に対し「先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つものを切り離したら、私には殆ど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれてゐない人形を与へられた丈で、満足は出来ないのです」(三十二)と述べている。この「魂の吹き込まれてゐない人形」を与えられたところで満足できない、と言つた「私」のことを「先生」は「或生きたものを捕まへやうと」したと表現しているのだ。「先生」はこの「無遠慮」な「私」に心動かされ過去を語ろうと思つたことは先に述べた通りである。

どうして「先生」が「私」に遺書を書き残そうとしたのか、逆に言えば何故ほかの人では駄目だったのか、という問題については「先生」の人間不信も関わつてくることだろう。「先生」は人間というものを信用していなかった。これは作中からも明らかである。

「信用しないつて、特にあなたを信用しないんぢやない。人間全体を信用しないんです」(十四)

「私は私自身さへ信用してゐないのです。つまり自分で自分が信用出来ないから、人も信用できないやうになつてゐるのです。自分を呪ふより外に仕方がないのです」(同)

過去に叔父に欺かれ、人のことを信用しなくなっていた「先生」は、更にKを自殺に追い込んでしまったという自責の念から自分自身のことすら信用できず、誰のことも信用できなくなつていたのである。それは自らの愛する妻についてすら同じことであつた。そこに現れたのが「私」という青年である。「先生」は「私」を信じてみよう、とそう思ったのだ。「私」がこの特別な存在足りえたのはなぜか。それを次節で見たいかうと思う。

### 三十二 「私」へと託した理由

「先生」は「私」に過去を問われた時、以下のようにも述べている。

「私は過去の因果で、人を疑りつけてゐる。だから実はあなたも疑つてゐる。然し何うもあなた丈は疑りたくない。あなたは疑るには余りに単純すぎる様だ。私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。なつて呉れますか」(三十一)

「先生」ははじめから「私」を信用していたわけではなかつた。しかし、「誰か」を信用して死にたいと思つていた「先生」は、そのたつた一人の「誰か」に、「私」がなれるのではないかと期待したのである。<sup>4</sup>

何故「先生」は「私」を信用してみようと思つたのか。

一つには、先に述べたように「私」が真面目で真つ直ぐな青年であつたということがあげられるだろう。狡猾な叔父に騙されたことのある、そして自ら自身が人を裏切つたことのある、人を信用できなくなつていた「先生」は、「疑るには余りにも単純すぎる」「私」ならば、信用することができるかも知れない、と希望を抱いた。「私」は真つ直ぐな、過去の人を疑つて信用できなくなる以前の「先生」にも共通する点が見受けられるような青年であつた。そしてまた現在の「先生」にはない純粹さを持つてゐる人間であつたのである。どこまでも「真面目」な青年である「私」

に「先生」は自らの信用を託そうとした。

また、一章及び二章一節で述べたように「私」が「先生」に強く惹かれていたというのほひとつの要因であろう。利害を考えず、ただひたすら自らの持たない「何か」を持つ「先生」に惹かれて行く、そして「先生」の過去から学びを得たいという真摯な態度に、「先生」は心動かされたと考えられる。

どちらにしても、「先生」は「私」との交流によって、「私」を信じてみようと思ひ、遺書を託したのである。

おわりに「私」の果たした役割

今回小説「こころ」における「私」のあり方についてみてきた。小説「こころ」内部で語られる物語は、「私」と「先生」の過去、そして「先生」の過去という二つの過去である。前半部で語られる「私」と「先生」の過去はあくまで後半部の「先生」の過去（を語る遺書）へのつなぎだとも考えられる。そのような中で、前半部の語り手である「私」の果たした役割とは何であったのか。それは、後半部の「先生」の遺書を引き出す、「先生」に遺書を書かせる役割であり、「先生」の遺書を「読者」へと提示する役割と考えられる。「私」との交流なしに「先生」の遺書は生まれ得なかった。

「私」に接触したからこそ、「先生」は遺書を書き残そうと思ったのである。そういった意味で、「私」はこの「こころ」という小説内で語られる「先生」の過去を引き出し、公開した存在であると考えられる。そういった意味では、「こころ」という小説は「私」によって生み出された物語だとも言えるのだ。

1 例えば、正宗白鳥は大正三年十月八日の『読売新聞』「読んだもの」（平岡敏夫編『夏目漱石研究資料集成』三巻 日本図書センター 一九九一年より引用）に於いて「先生の遺書」を読んでいると書いているが、その中でも主人公とされているのは「先生」である。また安部能成は『思想』第一六二号・特集漱石記念号（昭和十年十一月）（平岡敏夫編『夏目漱石研究資料集成』七巻 日本図書センター 一九九一年より引用）に於いて「この小説は全体に互つて、「先生」といふ主人公に対する純真な一青年の側から見た観察と、「先生」のその青年に対する告白とから出来て居る」と述べており、ここでもやはり「こころ」の主人公は「先生」だとされている。

2 この部分について、『漱石全集』第九卷（一九九四年岩波書店）注釈（重松泰雄氏）には、「手記を書いている現在の「私」の境遇がここにわずかに示されている。これは手記の執筆時期を推定する場合の手掛かりにもなるだろう」と述べられている。



3 「私」が「先生」に求めたものに関して、江藤亮氏は「私」という青年が人生の師を求めていたのではないかとし、以下の様に述べている。

「私」という青年は、学力や財力、地位などだけでは生きていけない、もしくは学力や財力、地位に頼ることをしない、そういう表面上に現れる幸福を否定する青年だったのではないか。(中略) 学力や座視力に恵まれながらもこれからの自分の人生に漠然とした不安や疑問を持っていた「私」にはこれから自分がどう生きていけばよいかを指し示すものが必要とし無意識の内にそれを求めていたのである。

そんな時に鎌倉の海で「先生」と出会った。「私」は「先生」と出会ったその瞬間に、その多感な心で、その人が自分にどう生きていくべきか指し示し、不安や疑問から救ってくれるものであることを感じとったのである。

〔夏目漱石「ころ」研究——「私」という人物についての考察〕〔九州大谷国文』二十八卷 九州大谷短期大学国語国文会 一九九九年七月〕による)

4 「先生」が「私」に遺書を書いた理由、「先生」が「私」に期待した事に関して、中本友文氏は以下の様に述べている。

先生は、将来の自分の孤独の理解者たるべきKを失い、以来ずっと自己の内面を、奥さんに対してもまた文筆を通じても、開放することをせず、胸の中のため込んでいた。だから先生は苦しい。そこに「私」が現れる。無論、当時の「私」は真

直でこそあれ、先生の内面を理解するには余りに未成熟である。しかし四年間の交際の中で先生には「私」に対する信頼が徐々に芽生える。先生は死なねばならない。しかし、永久に誰にも理解されることなく死んでくとしたら、それは恐ろしいことだろう。だから先生は「私」に遺書を書き送る。それは、「私」が今すぐに理解してくれることを望んでのことではない。やがて何年かの後に「私」が成熟の時を迎えるとき、その時の「私」の理解を先生は待っているのである。

〔『ころ』の「私」／漱石の一人称小説の「語り」〕〔高知大学学術研究報告(人文科学)』三十八卷 高知大学 一九八九年十二月〕による)